

を斬つて献じたので、頼朝は大いに喜んだ。時に義盛は進んで、「臣射て之を殺す」と陳べた。重忠は之に服しなかつたので、頼朝は國衛の鎧を檢せしめたが、鐵孔が甚だ大きく、他人の及ぶ所でなかつたので、重忠も之を見て、敢て争はなかつた。

後鳥羽天皇の建久元年、頼朝は京師に朝し、功臣十人の官を請うたが、義盛は右衛門尉に任ぜられた。數年の後に食邑を増されたが、梶原景時・結城朝光の爲に讒せらるゝに及び、義盛は勳奮の將六十六人と連名書を作つて其の誣枉を辯じ、且つ景時の罪状を上り、頼家に啓せんことを請うた。大江廣元は和解を策し、これを頼家に通じなかつたので、義盛は其の遲滯を詰り、廣元を上書させたので、景時は遂に誅せられた。

を抑留した。實朝が猶豫して決しなかつたので、義盛は再び廣元に就いて請うた。詞が甚だ激烈であつたから、實朝は、「われ思ふ所あり、姑く之を俟て」といつた。義盛は必ず目的が達せられるであらうと喜んだが、三年を経ても望みが達せられなかつたので、怏々として樂まなかつた。

曾て實朝は、戎事に老練な者を選び、顧問に備へようとし、義盛も其の選に當つた。順徳天皇の建保元年二月、泉親衛が北條氏討滅を謀るに及び、義盛の子義直・義重及び甥三浦胤長も之に黨し、事が露顯して捕へられた。偶々義盛は上總の伊北館に在つたが、三月、變を聞いて歸り、直ちに幕府に上聞し、自家の功勞を叙して、二子の罪を赦されん事を請うた。實朝はこれを許したので、義盛は大いに悦んで退出した。明日、義盛はまた宗族九十八人を率ゐて幕府に至り、胤長の罪を

教されん事を、廣元に就いて請うた。併し實朝は其の首謀者たるの故を以て赦さず、北條義時・金窪行親に命じて、胤長を捕縛させたが、義時は、胤長を故意に衆目を惹く所に引出して法吏に渡した。義盛は、これを見て大いに愧ぢ、門を閉ぢて出でず、胤長は遂に陸奥に流調された。

實朝は胤長の邸宅を義盛に與へたが、義時がこれ奪つたので、義盛は愈々義時を怨み、遂に北條氏を滅ぼさうと謀つた。一族の三浦義村・土屋義清・横山時兼・古郡保忠らは義盛に黨し、流言飛語が頻りに至り、鎌倉の内外が疑懼したので、實朝は人を遣つて之を宥めた。義盛は恩遇に感じて異圖を止めたが、併し義時が益々義盛を激昂させる行動を取つたので、再び兵を擧げようとした。實朝はまた人を遣つて義盛を諭させ、且つ其の様子を探らせたが、義盛は、「臣、上を怨む所なし。たゞ義時驕横に

して人を凌ぐを以て、子弟輩堪ふる能はずして、兵を起して罪を問はんとす。臣、制する能はず、また止むを得ざるなり」と述べ、五月二日、兵を發して幕府及び義時・廣元の邸を攻めた。義時は實朝を奉じて避け、子泰時をして防がせたが、義盛の兵は殊死して奮戦し、泰時も衆を勵して力戦し、勝敗が決しなかつたが義盛の兵は矢盡き、體疲れて前濱に退き、且つ幕府の兵の爲に、其の糧道を絶たれて困窮した。

偶々、横山時兼が來援するに及び、義盛の兵は再び振ひ、幕府の兵を走らせ、將に幕府に迫らうとしたが、泰時・時房が兵を分つて諸路を扼したので、義盛は進むことが出来なかつた。且つ子義直が戦死したので、義盛は哀悼して、「我が事やみなん、戦勝つも何をか爲さん」と神思昏迷し、江戸能範の兵の爲に殺された。年六十七歳で、一族も悉く戦死したが、時に建保元年五月四日である。

### ワットー W a t e a n

**事蹟** 十七・八世紀の交に出た佛蘭西の畫家である。西紀一六八四年（我が豐元天皇の貞享元年）に生れ、ルイ十四世の盛期に出現し、微温的に墮落した封建時代の風俗を描寫し、華奢優麗な人々の嗜好に投じたが、其の作品は甘美な陶酔的表現である。森の下で歡樂に耽つて居る男女の群に取材した畫が多い。歿したのは一七二一年（我が中御門天皇の享保六年）である。

### わに 仁

**名號** 古事記には和邇吉師に作る。河口懸海師の西蔵語研究に據れば、王仁の眞の讀方は王仁であつて、國語よみに據つて、二つの「ん」が省略されたものであ

る。「わんにん」は支那語でもあるが、其の音は西蔵語の自在精とこふ義である。

**系統** 舊記に據れば、王仁は漢の高帝の後裔で、其の祖狗の時に、百濟に移住したのであるといふ。併し前記の語源からいへば、純然たる西蔵の漢學者が、支那を経て百濟に歸化して居たことになるが、恐らくこれが眞であらうといふ。

王仁の孫を阿浪古首といひ、書首・文忌寸・武生宿禰・古志連・栗橋首・櫻野首などは、皆其の後裔である。

**事蹟** 應神天皇の朝、百濟の使者阿直岐が能く經典を讀んだので、皇太子菟道稚郎子は、これに師事された。天皇は阿直岐に向つて、「汝が國の博士にして、汝に賢れるものありや」と問はれたが、阿直岐は答へて、「王仁なるものあり、これ秀でたり」といつたので、天皇は荒田別・巫別

を百濟に遣つて之を招聘された。乃ち王仁は、天皇の十六年二月に來朝し、論語十卷・千字文一卷を献じた。皇太子は、王仁に師事して典籍を學ばれた。

王仁は能く和語に通じたが、仁徳天皇の即位の際には、「なにはつにさくやこのはなふゆこもり、いまをはるへとさくやこのはな」と詠じた。世に陸奥采女の安積山の歌と並べ稱して、和歌の父母とする。

履中天皇の朝には、齋藏の傍に、更に内藏を建て、官物を分收されたが、王仁は阿知使主と共に其の出納を記録した。阿知使主の後裔を東文直といつたが、これに對して、王仁の後裔を西文直といひ、共に其の部民を率ゐて文事を世襲し、我が國の文献發達上に功獻した。

古事記に、王仁來朝の時、論語十卷・千字文一卷を献ずと録してあるのに就いては、學者間に議論がある。

本居宣長の古事記傳には、「實は後の傳來なるを、後に世間に行はれし故に、これを應神の朝に王仁が渡來せし由に語り傳へしなるべし」といつて居る。

鳥田重禮は、「論語は經文のみにては十卷ある可らず、且つ古は之を計るに幾篇と稱して幾卷といはず、記に十卷とあれば、鄭玄の註本なるべし」といつて居る。千字文に就いては、「周興嗣の次韻本は、此の時未だ傳はる可らず、其の前の千字文ならん」といつて居る。

萩野由之は千字文に就いて、「古事記の年代に重きを置かざらんには、之を周興嗣の本とせんも、妨げなかるべし」と言つて居る。



納本

發行所	敬有名人辭典		昭和十一年十月十日印刷 昭和十一年十月二十日發行
	版權所有 複製不許		
東京市神田區駿河臺 三丁目六番地	編者	尾高豐作	定價五圓五十錢
	發行者	東京市神田區駿河臺三丁目六番地 關根喜太郎	
電話神田三三二一七八 振替東京七三一八一九	印刷者	東京市荒川区南千代二丁目二〇番地 河田保治	
	印刷所 印刷株式會社		



國寶院本 太平記

文學博士 鷺尾順敬校訂  
 菊判二〇〇頁 定價十二圓  
 總布裝函入

推薦諸先生  
 五十嵐 力 清原貞雄 德富猪一郎 松本彦次郎  
 宇野哲人 栗田元次 長沼賢海 三上參次  
 折口信夫 高木武 中村直勝 山田孝雄  
 河野省三 辻善之助 藤村作 渡邊世祐

日本精神の血となり肉となる國寶文獻の劃時代的複製!!

改訂 日本古語大辭典 (語誌篇) 松岡靜雄著 菊判一四〇頁 定價十二圓 近刊

推薦諸先生  
 幸田露伴 松井簡治 田潤 高野辰之  
 三上參次 坪井九馬三 山田孝雄 中村孝也 津田左右吉  
 上田萬年 金澤庄三郎 折口信夫 久松潜一 島崎藤村  
 新村出 吉澤義則 藤田元春 米田庄太郎 窪田空穂  
 幣原坦 藤村作 保科孝一 濱田青陵 \* \* \*

日本語原研究の一大寶庫!! 古典研究上の一大資料!!

尾高豐作責任編輯

子供の問題全集

額價各冊 一圓五十錢  
 送料各冊 十四錢

- 1 兩親とは何か 吳判四〇〇頁(既刊)
- 2 青春期の問題 吳判四〇〇頁(既刊)
- 3 子供の問題とその取扱 吳判三五〇頁(既刊)
- 4 子供と學校の問題 吳判四〇〇頁(既刊)
- 5 殊々な子供の研究 吳判三五〇頁(既刊)
- 6 子供の問題實話集 吳判三五〇頁(既刊)
- 7 子供の發達と性格 (近刊)
- 8 子供に關する思想 (未刊)

霜田靜志先生著作目録

- 母の書 新菊判三三〇頁價二・三〇
- 問題の親 四六判三八〇頁價二・三〇
- 子供への理解 四六判三六〇頁價二・三〇
- 問題の教師 四六判三八〇頁價二・三〇
- 幼兒への理解 四六判三八〇頁價二・三〇
- 低學年兒童の教育 四六判三二〇頁價二・三〇







263  
426



終

